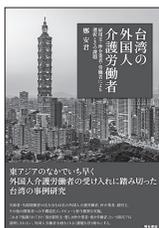


鄭安君著

## 『台湾の外国人介護労働者』

——雇用主・仲介業者・  
労働者による選択と  
その課題』



評者：高畑 幸

### はじめに

本書は、約24万世帯に外国人介護労働者が住み込む台湾における「外国人介護労働者の持続可能性」を、労働者42人（うち14人は非法滞在者）、仲介業者、雇用者、政府関係者へのインタビューと参与観察により明らかにする。少子高齢化と敬老精神は東アジア諸国に共通するが、少子高齢化が数値化できる事実なのに対し、敬老精神に基づく介護のありかたは文化圏、社会制度、家庭、個人によって差異が出てくるだろう。台湾には日本のような介護保険は無く、老親を抱える息子・娘たちが自費で介護者を雇う在宅介護が基本だという。一般的に在宅介護は好ましいとされがちだが、そこに立ち現れるのは著者が「総弱者化」と呼ぶ、介護に関わる人と産業そのものの脆弱性である。

本書は、先行研究が少ない分野で、制度論だけでなく在宅介護をめぐるステークホルダーたちの生々しい「声」から構成された、日本の読者にとって大いに示唆となる実証的研究である。本書は5章からなり、著者の博士論文「台湾の介護分野における外国人労働者受け入れに関する問題——労働者の労働・生活・行動と失踪問題の視点を軸に」（宇都宮大学、2019年）を

ベースとしている。以下に各章の内容を紹介したい。

### 問題の所在

「序章 問題の所在」では、まず、外国人労働者の受け入れと移住労働の女性化について、東アジアと東南アジアの間での国際労働力移動、台湾が東南アジアの労働者を必要とする理由、移住労働者の女性化について論じられた後、本書の問題意識と目的が示される。台湾では1992年から外国人労働者の受け入れが始まり、その利益最大化、コスト最小化、不法就労の防止を目指して厳格な管理（受け入れ人数、労働者の管理と排除、雇用主変更および家族帯同の不可）が行われた。このような厳格さは日本、台湾、韓国も類似するが、台湾の外国人介護労働者の特徴は台中関係の複雑さから東南アジアの労働者に依存すること、労働者の大半が女性で、雇用者宅に住み込み働くことだ。特にインドネシア人労働者が多かったが、2015年にインドネシア政府が労働者送出国を停止した後、ベトナム人が増加した。このように介護労働市場が買い手市場から売り手市場へ転換した時期に、「改めて外国人労働者が直面している問題および問題の発生要因を考察する」ことが本書の目的である。そして先行研究では「強き雇用主・悪しき仲介業者・弱き外国人労働者」が強調されることに著者は疑問を呈している。

### 台湾における外国人介護労働者増加の背景

まず、「第1章 台湾における外国人介護労働者増加の背景——介護制度・資源との関係を軸にして」においては、台湾における外国人介護労働者の受け入れ拡大について、介護の資源、介護政策、宿泊型の介護施設が台湾に少ない理由、家庭介護を維持するための外国人労働者受け入れの背景が示される。台湾で在宅介護が基本となる背景には儒教思想の孝道（親を敬

い仕える)と1980年の老人福利法(高齢者の扶養を直系家族の責任とする)がある。とはいえ、現実には核家族化と夫婦共働きの増加により家族が介護を担うのは困難という、日本と同様の社会的背景がある。また、正式な介護制度は2007年の「長期照顧十年計画」から始まるが財源はタバコ税等で、2020年時点でも日本のような、一定年齢以上の労働者が一律に収める介護保険制度がない。したがって、介護コストの負担は主に各家庭なのである。

### 介護労働者となる外国人女性の選択

続く「第2章 介護労働者となる外国人女性の選択——労働課題と女性たちの行動」は、女性介護労働者42名(インドネシア人19名、フィリピン人16名、ベトナム人7名)へのインタビューに基づく。移住労働に至るまでの彼女らの動機づけ、出稼ぎ先の選択、家庭介護および施設介護の労働実態、職場で問題に直面した場合の抗議活動について詳細に語られる。彼女らが台湾へ行く動機は母国より高い賃金を求めてだが、他の出稼ぎ先(日本、韓国、カナダ等)と比較して仲介料や早期の渡航可能性等を勘案し、台湾での介護労働が選択された。彼女らの一般的な賃金は日本円に換算して7万円余で、最低賃金を下回っている。また、介護以外に家事労働をさせたり雇用主が経営する飲食店で働かせる等の契約違反、雇用主による暴言・暴力、感情労働による疲れと喪失感、住居や飲食等の生活環境等の問題がある。これに対し労働者たちは台湾の行政機関へ訴え、シェルター等を作るが、即時かつ現実的な解決策は失踪なのである。

### 外国人介護労働者の失踪と失踪後の非合法介護労働

そして、「第3章 外国人介護労働者の失踪

と失踪後の非合法介護労働——労働者と雇用主の不安」では外国人労働者の失踪問題が焦点化される。外国人労働者は、なぜ失踪するのか。失踪した非合法労働者とわかっていながら、なぜ仲介業者は彼女らを紹介し、雇用者は雇うのか、という素朴な疑問に対し、著者は非合法労働者14人と数名の仲介業者および雇用主へのインタビューから、合法的な労働にさえつきまとう不安、仲介費用の負担、非合法介護労働者の需要とその待遇までを詳細に明かしている。台湾においては2004年以降、毎年約1万人の外国人労働者が失踪し、中でも介護労働者が多い。その原因は、金銭的理由(低賃金・仲介料の負担)、長時間労働、雇用主による管理や暴力等がある。台湾で働き続けたいという希望がありながらも、合法的身分での労働に限界を感じて労働者は失踪を選択するという。興味深いのは、失踪後、彼女らはレストラン、弁当屋、ビル清掃、農業、ベビーシッター等に従事し、台湾の人びとは彼女らに対してあまり不信感を持たないということだ。台湾ではベトナム等からの外国人配偶者が多く暮らし、合法的介護労働者が雇用主のレストランで働く光景も日常的だからだという。また、ある雇用主の元にいた合法的労働者が転職すると、雇用者が次の労働者を迎えるまでの「空白期間」が生じ、そこを失踪者が埋めるといった、失踪者向けの労働市場さえ存在する。当局からの摘発を逃れるため、上記のような短期間で交代できる職場は失踪者にとっても好都合である。そして失踪者同士はSNSで連絡を取りあい、より条件が良い仲介業者を選ぶことを繰り返した結果、合法的外国人介護労働者が最も低い賃金で働かねばならないというパラドックスが起きてしまう。とはいえ、非合法労働者と合法労働者の間にも妬みや金銭の貸し借り等の複雑な緊張関係があり、事態は一筋縄ではいかないのである。

### 失踪問題の社会的意味

「第4章 失踪問題の社会的意味——制度的弱者のジレンマと「総弱者化」の進行」では、特に2010年代半ば以降に加速した国際的な介護労働者獲得競争による、台湾国内の介護労働者の売り手市場化、その中での雇用主・仲介業者・労働者の三者間の緊張関係を明らかにし、この三者が「総弱者化」していると著者は結論づけている。雇用主は自らの仕事と在宅介護で疲れ果てた末に外国人介護労働者の到着を待ちわび、労働者のマネジメントも異文化コミュニケーションも素人のまま「外国人」との同居を始めねばならない。また、雇用主の多くは中間層であり、公的支援のある低所得者層や経済的余裕のある富裕層とは違い、賃金が安い外国人介護労働者に頼らざるを得ないという構造的な問題もある。台湾の仲介業者も今や労働者不足のために各国の現地業者に仲介手数料を払い、政府による規制と監視に晒され、よりよい労働環境を求める労働者と労働者を繋ぎ留めたい雇用主との板挟みだ。そして労働者も準備不足のまま異国の労働現場に立つ。台湾への出稼ぎを決めてから約1か月で渡航し、台湾到着後1～2日で雇用主宅に入り、生活環境も言葉も違う老人の世話を始めるのだから無理があるというものだ。この「弱者同士のぶつかりあい」の中、労働者は失踪し、雇用主は次の労働力を確保するため失踪者を雇い、人手不足の仲介業者は合法労働者と失踪者の両方を仲介するのである。

### 弱者を作らないために何が必要なのか？

そして最終章となる「第5章 弱者を作らないために何が必要なのか？」では、本研究の結論と主張、日本を含む、外国人介護労働者への依存度が高い国々への示唆がある。著者の主張は明確で、従来の経済利益最大化と社会的コス

ト最小化を目指す思考と制度から脱却すること、外国人労働者が必要とする医療や住宅等の需要を社会経済の活性化ととらえること、外国人労働者を台湾の介護制度に包摂し、台湾人同様に専門職化していくこと、介護および介護労働への市民意識を改革すること、である。コロナ禍や送出国の政策転換等、外国人労働者の供給は常に不安定だからこそ、長期的視野での介護労働者の育成と受け入れ、彼（女）らへのケアが必要なのだと本書は結ぶ。

### 本書の評価と若干の論点

何よりも、本書の白眉は失踪者14人へのインタビューであろう。人間を相手とする24時間のケアは綺麗ごとだけでは成り立たない。いわば雇用者・仲介業者・労働者が一体となって非合法性の「見逃し」を行っている。それは制度の綻びがあることの証左なのだが、本書ではその制度の批判や非合法性の告発よりも、日々の介護に奔走する人びとへの著者の温かいまなざしを感じられる。

言うまでもなく、聞き取りデータの積み重ねから上記が姿を現すに至ったのは、台湾出身の著者だからこそ、関係者への核心を突く取材が行われたことによる。雇用主と仲介業者には中国語、労働者には中国語と英語で聞き取りを行い、日本語で執筆されたのが本書である。介護を必要とする肉親を目の前にすれば、人は経済的合理性だけでは解けない計算式を突き付けられるということを、改めて思い知らされる。

その上で、あえて問題点を指摘するならば以下の2点である。

第一に、老人介護に関する台湾の「選択」の相対化である。序論で、少子高齢化と介護需要の増加に対する各国の対応について、介護に必要な労働力とコストの調達方法の選択肢をいくつか示しておき、その上で、台湾がなぜ「住み

込み・外国人雇用」を選択したのかを相対化しておくのと台湾の事情に通じない読者の助けになるのではないだろうか。

第二に、先行研究のレビューのほとんどが、日本と台湾の文献にあることである。失踪者を含む外国人労働者の生々しい語りという著者のオリジナルデータが貴重だからこそ、本研究を日台のみならず、より大きなスケールの国際比較としてはどうだろう。本研究で指摘されるのは、突き詰めると外国人介護労働者の雇用制度の矛盾である。これに対して、他国ではいかに解決が図られているのかを比較研究として示すことができると思う。

とはいえ、本書が、著者が長い時間をかけて多地点で丁寧に行った調査に基づく労作であり、本書が明らかにしたことの数々が、現在の日本社会が抱える外国人労働者問題と通底することは間違いない。そして、介護が、常に弱者を必要とする産業で良いとは思えない。現在の

日本で必要不可欠の社会的インフラとなった介護保険制度と介護サービスを持続させるために、社会全体でのコスト負担と労働者・雇用者・仲介業者の可視化、そして彼（女）らへのサポートが必要だということを、台湾の経験が改めて我々に教えてくれる。

（鄭安君著『台湾の外国人介護労働者——雇用主・仲介業者・労働者による選択とその課題』明石書店、2021年8月、x + 186頁、定価3,850円（税込）

（たかはた・さち 静岡県立大学国際関係学部教授）

#### 【付記】

なお、本稿執筆にあたり、同著者により本書の一部を加筆修正し2020年のデータに更新した論文「台湾における外国人介護労働者の失踪問題——制度的弱者のジレンマと「総弱者化」の進行」（『移民政策研究』12：148-164）も参照した。